

# コルドバの壁は白かった



第4巻第1号  
通巻第48号



ユダヤ街の白い壁とペーパの街路

## Gレポート 第一部最終回

街並みの景観を保持するために、マンションの高層階を取壊しなさいという判決が下った。法律で明文化されてない権利を背景に、私有財産権を制限しようとしたわけで、これまでもあまりない類の司法判断である。このことも含めて画期的と言ってよいのではないだろうか。

国立市の南側に延びる大学通りに面する高層の建物を巡っての裁判のことだ。通りに沿った美しい風景は、住民の長い年月にわたる努力の結果つくられ守られてきたものだから、そこに生まれてくるはずの景観利益という付加価値は、法的に保護されるべきだといふ。長い年月と言っても、国立という街自体が生まれ発展して、たかだか数十年のことだから、歴史的な街並み保存とはその重要さは異なるように思える。それでも、この年月の間に、道に沿って植えられた木々は立派に生え、夏には緑に繁り木陰を提供し、秋にはきれいに

色づき人の目を楽しませ、また少なからぬ酸素を排出して環境に貢献してもいるのである。並木は街のシンボルとなり、人々の生活になくてはならぬものになった。さらに、通りに面した建物の高さや、並木を越えぬよう自制してきた住民の努力は、抽象的な、景観という心のよりどころを生んだわけである。

立派に成長した並木と周辺の建物が穏やかに調和している風景を見て、ひとびとは、こんな街に住みたいと思っただろう。不動産利益のために街の美しさを利用するにも関わらず、その価値の源にあるルールを無視するようでは、これは大きな矛盾をはらむ。住民との対話に誠意を尽くすことなく利益の追及のみを求めて、建設を強行したことについても、裁判所は不適切だと断じた。建物を建設しようとするときは、建築確認という行為が必要である。計画した建物が、建設に関連する様々な法律に適合しているか、図面や書類を提出して役所がチェックするのである。建築物そのものの安全性や快適性などの基準を決めた建築基準法や、ひろく都市や地域的な視点で約束事を決めた都市計画法、都道府県あるいは市区町村が定めた条例や、地域の条例なども含まれる。そのなかには、例えば建物の壁面は道路から何メートル下がらなければいけないとか、屋根の形や色に関する規則があるところもある。道路に沿って緑を何メートル以上植えないとか、もっと切実なところでは、敷地に降った雨をある量溜めてから地面

(二面に続く)

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせ E-mail : colors@go-karasu.com

空間を規定するには、縦・横・高さという三つの要素が必要である。あなたの周囲にある何もかも、眼前のコーヒー・カップやガス・ストーブのよつなものを、それらが空間の中にどのように位置を占めているのかを説明しようとするとき、XYZという要素を用いねばならなくなる。もっとも、日常の生活の場面において、その必要性はほとんどない。寧ろ、座標を使って説明されたりしようものなら、理解に苦しむ可能性が高くなるばかり。

例えば、テレビの上に置かれてるリモコンを取ってもらうのに、「君の右足の親指の先端を原点として(二〇三〇、三五、一〇八)の位置にあるリモコンを取ってくれ。但し、単位はセンチ、北をXの正の方向とする」などと言われたら、あなたは困惑するばかりだろうし、そのような指示を出す側にとっても面倒至極。それよりも、「テレビの上のリモコン取ってよ」という表現が適切であることに異存はあるまい。しかしながら、正確さを要求されるような場合も無いわけではなく、その際には煩雑な作業が要求される。

年末の宝くじで三億円が当たったとしても家を建てた気など毛頭ない私だが、仮に、そんな気になつたとしても、幸い近所に立派な建築士様がいるので、すぐさま電話をする。「ばか猫専用の出入り口と防音のスタジオのある恰好の良い家を建ててくれたまえ。予算は三億円である。そうそう、夏に暑いのは我慢できるけれど、寒さには耐えられないといふこともお忘れなく。そんなことを伝えることにしよう。暫くして陣中見舞がでたら、件の設計事務所を訪れよう。なるほど、近頃は図面は手で引くのではないのだなあ。コンピュータの御時世だ。図面などという

ものにはあまり関心があるわけではないのだが、自分の家だとすれば話が違ふ。仕組みはわからないものの、横から覗き込んであはだこつた、と。素人のくせに余計な口出しはするは、珈琲だ、灰皿だ、寿司は助六だ、と。あげくの果てには、うまい寿司にはうまい酒……と、これでは何をしにきたのかかわらない。いやいや、成金施主の迷惑伝が目的なのではなかった。

基本的なデザインが終わってからの彼らの作業は、紙と鉛筆のかわりに、コンピュータを使う。けれど、実際にい行なわれていることは旧来と同じ。結局のところ、工務店の人々が間違いない仕事に取り組めるように、間取りや扉や配管やら、屋根や断熱材や風呂桶やらの位置や材質を指示する仕様書を組み上げていく。主に座標を指定し続けることを中心に。

たかだか一軒の民家を建てようとするだけでも気が遠くなるほど多くの図面が必要になる。設計図にだって美醜や哲学があるのだ、ということは今も切實くとして、正確な図面が揃えば、建築士と工務店の間では一応の了解が得られ、あとは土地と建物(と役所相手の煩わしい事務事務事務)がありさえすれば、予定通りの家が建つことになる。それで十分とはいえないが、ビジネスとして考えるなら、忘れてはいけないのは、お施主様の満足である。工事を始める前にお施主様の了解を得なくては話にならない。家を建てようといふところで、『家を建てる前に』だ。初めてのマイホーム読本などというマニュアル本を読んでみた人はなかなか裕福だといふ点を除けば、私たちと変わらない。(最終面に続く)

**今日の紙面から**

- 二面 オープン面
- 空中の権利・地下の権利
- 三面 芸術面
- 二〇〇二年のイワマレイ
- 四面 からすライブラリー
- CD、イン・メモリア・フツリ
- 本 『ねこくらし』
- 映画 『マンマン 夏の思い出』
- 六面 社会面
- やんひのお天道さまは見通しやすー
- 七面 英語面
- 彼女はニッポン

からす新聞は×××××  
が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。  
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



(一面から続く)

に自然浸透させたい、などということも地域の条例で決まっていることが多い。

今回争いになったマンションは、建築基準法を満たしていたから建設されたこと自体は違法とは言えないかもしれない。ただし、建築基準法という法律はその扱うところは非常に狭い範囲に限定されている。一方、建設行為というのは、社会的にもっと複雑で転換した行為であった、さまざまな社会的常識に照らし合わせて考えた場合、このような狭い法律の範囲ですべて解決できるものではないことくらい、建設にかかわる人間なら誰も知っているのである。逆に、例えば非難や設備の考え方など、実態としてこちらのほうはどうしても優れているにもかかわらず、法律を守らなければならぬために認められず、余分な設備投資を強いられる、空間の質を損なったりするというケースもある。要するに、非常に程度の低い法律という印象を免れないのが建築基準法である。

その土地は個人の所有物で財産だから自由にしたい、という考え方は正しいと言えなくもない。しかし、隣の敷地や地域と、地面はつながり空も空間もつながっているのである。場合によっては建物もつながっている。ひとと時間も繋がっているのである。そんな基本的なことを無視するのはよくない。

空中の権利、地下の権利。限られた地面を有効に活用しようとするれば、当然建物は上へ下へと延びてゆくのも道理であろう。

コルドバの街は、斜面に沿って起伏があり、カテドラルや鐘楼が突出しているのを除けば、最も古い地域ではせいぜい二、三階の高さで建物が続き、細い路地が縦横に走っている。河岸のメスキータの周囲や、少し坂をのぼったユダヤ人街は、よく手入れされていて、往時の景観を残し、重要な観光資源となっている。

細い街路の両側の壁は白く、青い空を切り取り、路面はコルドバ独自のペープメントで美しく施されている。小石をひとつひとつ木端立てて、すなわち覆かせるのではなく立たせるように半分ほど埋めて、路面の模様をかたちづくるのである。素足で歩いたらツボを刺激して、さぞ健康によからうという具合である。街路の至る所で、コルドバの特徴的な中庭で、メスキータの庭で、ちょっとした広場で、どこでもこの模様を見ることが出来る。今では、なかなか職人がいないため、簡単にはできなくなってしまうらしい。スペインでも、職人の手の技が消えてゆく同じ運命にあるの

かと嘆かわしくなる。

このペープメントにちょうどよい日本語はなんだろう。舗装では、ひとつひとつ石を埋めて置いていく手仕事のプロセスや、できあがりの心地よいランダムさが伝わらないだろう。かといって石畳では、小石を敷き詰めたことにならないし、砂利道では乱暴すぎる。スペインだけではなく、コルドバ独自のものであるなら、日本語に適切な言葉が見つからなくても当然といえば当然であるが、それにも何と書くのがよいものか。南スペインの強い日差しを乱反射して、眩しさを減じる効果もあるのだろうか、少ない雨が降ったり水をまいたりすると、木端だった石がきらきらと美しく光るだろうか、保水効果も少しはあるかもしれない。ひとつひとつの石が、あつちを向いたりこつちを向いたり、くるくると踊っているようでもあり、力強く緊張感漲って迫ってくるというよりも、寧ろ優しくやさしく儂さのようなものを感じるペープメントだ。ここはアンダルシアである。

シナゴークとはユダヤの教会である。この前庭に施されたペープメントの石模様は黒光りして少しの緊張感があった。庭のスケールが身体にちょうどフィットしていて、きちっとした感覚を助長するのもかもしれない。教会の建物は驚くほど小さくかわいらしいものだった。マドリッドの近郊の、トレードにも美しいシナゴークがふたつある。こちらは規模も大きく建築物としての重要度も高いのだから、コルドバの宝石のよ



シナゴーク(ユダヤ教会)の前庭のペープメント

うなシナゴークもまた、それらと同じよう美しい文様と文字の装飾が内部の空間を織りなしていて、高い技術を思い知らされる。

現在の街の中心部に向かい坂をのぼってゆくと、少し年代が下がった地域では、街並みももう一層か二層ほどは上積みされる。それでもエレベーターを使わなくても上下に行き来できる高さである。そのポリウーラムを縫って、同じように細い街路が連なり、大小さまざまな形の広場をつないでいる。こうしてみると広場は、単純に街路の広がったところのようであり、ひびとびとは広場に佇んで延々としゃべっているように、街路にも常に立ち止まっては通行の邪魔になる。両側から建物がせり出してくるように感じられるほど街路の幅は狭く、建物が一層高くなった分だけ空が鋭利に切り取られる。

今度のプロジェクトの敷地は、こんな地域にある。地面に限りなく接触したコルドバの街と、ひとつひとつの生活である。敷地の近くには、テンディーリヤスという、街の中心をなす方形の広場があり、ひとつとは常にそこに集まっている。街路を歩き広場に集う、どこまでも地面の上の平面的な動きである。街を見渡せるような高い場所はない。観光資源としても眺望は有用である。

これから益々アンダルシアのなかで重要度を増すといわれる、コルドバ市の将来を見据えて、新たな街の計画が行われている。そのうちのひとつが中心街の再



市民の憩いの場、テンディーリヤス広場

活性化であり、そのための新たな仕掛けをつくらうということなのだ。街の中心に位置して空白となっているのがプロジェクトの敷地である。ここにひとつとを呼び、あらたな街の拠点として整備しようというのが、市の都市計画局のねらいである。文化の発信につながる。建設には資金も必要とする。民間の資金を導入し街を整備することを考えなければならぬ。

このような観点から、通常許容される建物の床面積を増やし、建物を高くすることで、空の広場のようなものをつくらうというアイデアなのである。地上の広場に対して、上方から街を見渡し、その向こうになだらかな丘を眺望しようという、ロマンチックな計画である。

これまで、ひとつとが守ってきた建物の高さを越えて、新たな街のかたちをつくることになる。一度つくられたかたちは変えることは困難だし、今ある街の風景は、長い年月をかけて形成されてきたものだ。それを依頼された我々設計者は、ひろく確固たる視野をもって計画にあたらない。街並みの特徴を破壊することなく、新たな機能と価値を創造しなければならぬ。そして、そこに建設される建物が民間のものであったとしても、新たな街のかたちの創造によって生まれる価値は、街のひとつと皆のものではない。ならばならないということである。でなければ、このプロジェクトが発表され、市民の議論にさらされた時に、彼らを納得させるだけの強さは持ちえない結果となってしまうだろう。

さらに、地面の下にはローマの遺跡が眠る。この遺跡を掘り起こしてパブリックの耳目に開放しなければならぬ。地下四、五メートルくらいの深さらしい。コルドバの基礎をなしたローマ時代のかたち、現在まで積み重ねられた地上のレベル、そして将来へ向かう空中へのひろがり、これらを重ね合わせることは、単に水平方向に広がっていた都市空間に垂直方向の軸を導入するという、物理的な軸のベクトルの変更ではなく、過去から続く時間の軸を明確に意識することである。このプロジェクトはとんでもない重層性を帯びているということになる。

このようなヨーロッパの時間のなかに両足を突っ込んでしまふようなプロジェクトには、なかなか巡り合わないだろうし、われわれが日本人の建築家ならなおさらである。「ここはひとつと」ころして計画をはじめなければならぬ。

(篠崎健一)



## Rei's Gallery



### 2002年イワマレイ作品



今年は何んな所に足を運んだ一年でした。月に一度ぐらいの割り合いで旅をしては色々な発見をしてきました。

一番刺激的だった場所は関西。関西での生活の長い母を持つせいか、すっかりハマってしまった。関西はとってもパワフルで私自身のパワーをお裾分けしてもらった。あと、岐阜県にある美術作家荒川周作氏がつくった「天命反転地」が、今私の中で最も暑いスポット！日本が世界に誇れるアミューズメントスポットと言っても過言ではないでしょう。その名の通り、天地が反転して人間が天から授かった命まで反転してしまうような、大人のアスレチック。これなら「アイスランド」にも勝てる。今はまだ知名度は低いけどあと、五年もすればきっと人気スポットになるはず!! (岐阜県民には大不評)

アトリエに籠って黙々と制作するのもいいけど、外にでて行って色々な人に合ったり、話したり、作品を発表する方が実は私の性に合ってるみたいだなーと気付いた二〇〇二年でした。

というわけで、今年一番力を注いだ活動「ともたち一〇〇人形」の展示風景と、八月から始動したハコキチというお店での作品です。

さて来年はどこに行こうかな？



## 『In Memoria Futuri』

ゲルニカ

テイチク、2002年、TECN42858



戸川純という女性がいる。本人は女優を本業と考えているのかもしれないけれど、私にしてみれば、世界でも稀有な女性ヴォーカリストのひとり。かつては、ゴールデン・タイムのドラマや音楽番組に登場することがあったし、日本でウォッシュレットが認知されたのは、彼女の、おしりだつて、洗ってほしい」という、あのCMのおかげだと言つてもいいくらいで、それなりに知られた顔だつたはずである。昨今の知名度はいかほどか。かなり不安なので、ここで取り上げて、みなさんに広める次第。

が、彼らのコンセプトを実現するには戸川純が欠かせなかつたのは間違いない。今で言う、電波系・びかつと系だという印象が強く、いるものと捉えられ、一時の花を咲かせたあとは静かに沈んでいったというよう。もっとも、消えてしまったわけではなく、根強いファンはあちらこちらにいる。

ゲルニカの二〇周年を記念するこのアルバムはゲルニカの音源のほとんど全てをリヴァーしたもので、全貌を窺い知るに足る作品だ。同時に、ヤプーズのライヴがDVD化されているので、戸川純が何者であるかを、自分の目で耳で確かめてほしい。こんな才能が日本にも存在するのだ、ということ。

(全太)



## ねこぐらし

広田敦子

文芸社 ISBN4-8355-0915-3

2000.11.01 初版第一刷



Books

タイトルから想像がつくかもしれないと思うのが半面、わからないかもしれないというのが半分。実は、かわいらしい猫の写真集である。カレンダーなどよく見るような、わたしの所有物よ、といわんばかりに、カメラのレンズが猫を溺愛してしまった写真集とはちょっと違う。著者(と言ってよいのか写真家)は、猫たちの生活そのままを撮っているのである。彼女は、九州の大学で建築を学んだ74年生まれ若い世代ということだが、この写真集の一枚一枚の写真から、ただ愛すべき猫たちへのいとおしさが伝わってくるだけでなく、都市の空間的ひろがりを感じられるのもそんなバックグラウンドが作用しているのかもしれない。猫の生活をとおして、実は我々自身の生活を思い返すような写真集である。そんなところが気に入った。

(篠崎健一)



# ヤンヤン 夏の思い出 (A One and A Two)

2000年公開(台湾・日本)

DVD:ポニー・キャニオン

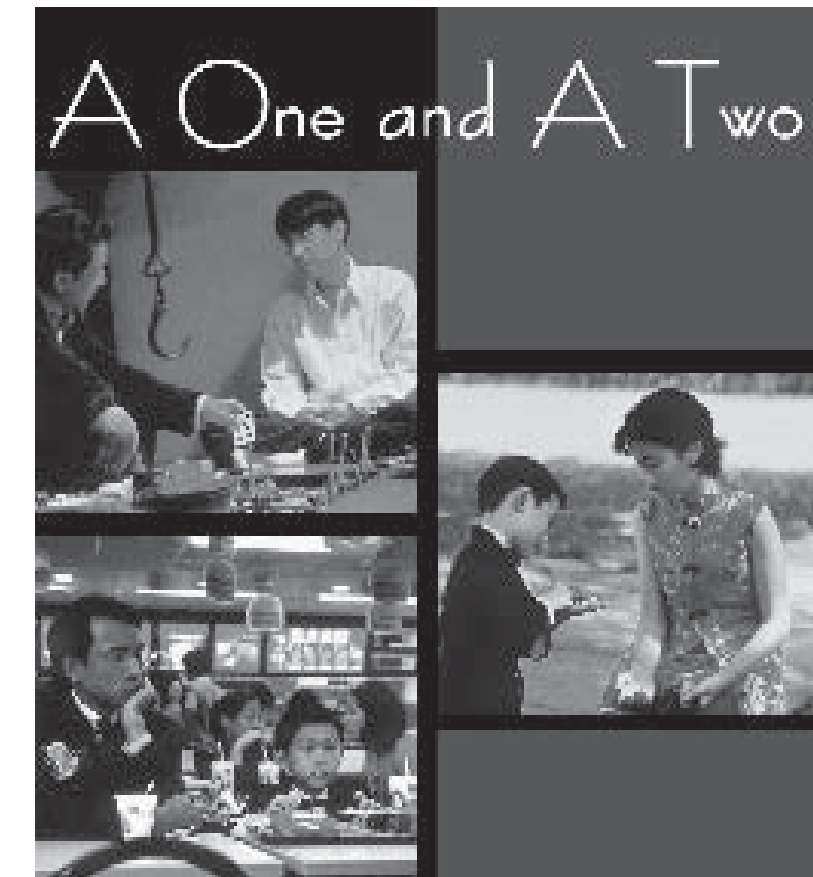
監督・脚本:エドワード・ヤン

出演:ジョナサン・チャン、ケリー・リー、イッセー尾形、ウー・ニエンジェン、エイレン・チン

こっちに住むようになってからと言つもの、余り映画を見に行つてない。もつとも日本にいる時から映画が好きだという割には余り映画館まで足を運ばなかった。それほどは変わらないのだから、それでも回数は確実に減った。前よりも売れている映画を見に行く回数が増えたかもしれない。時間のあいたときに、その時に大々的に宣伝して、何処でもやっている様な映画の中から好きなものを選んで見に行く。英語という面倒くささから単館上映の映画を、わざわざ情報誌でピックアップして見に行く様なことはなくなった。ポーランド人の映画好きの友達が時々誘ってくれるのに行くくらいだろうか。とにかく、イギリスに来てから長い間、自分から積極的に映画に対して興味を傾けることがほとんど無くなっていったのだ。まるで映画のことをすっかり忘れていたかのような感じだ。それが先日DVDプレイヤーを購入してからというものの、少しづつ変わってきた。まず新しいものを買った嬉しさから、とにかく使いたい。レコード屋のDVDコーナーへ、セール品の映画を買いに足げに通つた。面白いものからつまらない物まで色々買ったが、一つ気が付いたことがある。今まで洋画、と自

分の中で一括りにしていた物達は、実は英語圏の映画かそうで無いかと言う違いがあったのだ。こちらではワールドシネマというジャンルで英語圏以外のものは一括りにされていて、アジアの映画もフランス映画も同じワールドシネマになってしまつたのである。僕からすると凄く不思議な感覚だが、こちらの人にしてみれば当たり前のだろう。と同時に、今まで自分が好きだった映画の半分くらいはワールドシネマだったことにも気が付いた。そんな中、僕の映画熱が徐々に復活して行く中で、ばつたりとこの映画に出会つた。

「A One and a Two」エドワード・ヤン監督による台湾映画(二〇〇〇)、邦題は「ヤンヤン 夏の思い出」。ある家族の物語で父親、母親、小学生の男の子と高校生の女の子、母がたのお婆ちゃんで構成される家族を中心に、母がたの伯父さん夫婦、その元彼女などの様々な人達がからんでくる。全体を通してストーリー的には実に色々なことがそれぞれの登場人物に起こるのだが、映画自体は決して派手ではなく、その出来事を中心に描くというよりもそれぞれの登場人物、又は色々なことによつて移り変わる登場人物の内面を中心に、実に暖かい視線で追つてゆく。出演している役者達もいい。日本のヒジネスマン役で登場するイッセー尾形やお父さん役のウー・ニエンジェン、彼は特にいい役者だ。僕はこの映画のオープニングが凄く好きで、伯父さん夫婦の結婚式のシーンから流れるように静かに物語が始まる。繰り返しの毎日にふと気が付き悩み、宗教に頼り山にこもつてしまつ、ちよつと樹木希林(キキキリン)似のお母さん。何事にも頼りない感じの伯父さん。恋心に揺れる長女。たまたに父親をどきりとさせるような質問をする、屈託なく元気な長男のヤンヤン。意識不明で寝たきりになつてしまつたお婆ちゃんに、それぞれがその思いや近況を語りかけて行きながら物語は進んで行く。偶然昔の恋人と三十年ぶりに再開し、自分の人生を振り返る父親のエピソードと長男や長女達の今が重なつて行く様子を、親子それぞれ別々に一人の人間としての人生、幼少時代から大人になるまで、あらゆる世代に個別の時間、個々の人生がある事に気が付かされた。血の繋がりによつて集められた別々の人間(もつとも、同じ人間はこの世に存在しないだろつが)の集まり、家族。その家族という系に束ね



られた別々の人生達が、お互いに少しづつ干渉したり、交差したり、重なつたりしながら進んでゆく情景に僕は、結局は血の繋がりがだと言つてしまいがちな家族という繋がりが、何となくどんな物なのか、それだけの世代を通じた視点で教わつたような気がした。

今、ロンドンにはクリスマスの一色。街は随分とにぎわつていて忙しいように見える。丁度そんな時期だからだろうか僕は無性に日本が恋しくなつた。お正月になると、やっぱりこの時期は日本がいいなあ。と思うのはそんな家族の繋がりの所為なのだろうか。他にも日本でしか出来ないことや友達との繋がりが理由色々あるのだから。ただ、結婚式やお葬式などの時にも感じる家系図を通じたような自分のルーツ、血の繋がりが、その世代のようなものを肌で感じる時期なのがお正月で、それも大きな理由であることには違いない。加えて、師走、年越し、年明けとその独特の雰囲気、風景も好きなのだ。そんな

情景を思い浮かべると、やっぱり、僕は日本で生まれて日本文化の中で育つてきたのだなあ。と感じる。更には日本という国自体も僕にとっての家族の様なものなのだろうか、と言つ気さえてくるから不思議だ。家族という繋がりが自体に色々な形がある様に、日本を嫌いな人もそうでない人も、無関心な人もいるだろう。僕にとっての日本は恋しくなるようなものだったのは幸いで、僕にそう感じさせてくれる要因である色々な人達との繋がりを思いながら、買ってあつたワインを開けた。窓の外は雨。今夜は冷えるらしい。晴ればもちろん気分はいいが、天気が悪いのもうそれほど気にならなくなった。それでもやっぱりお正月が恋しくなつたので、曇り空の向うに向かつて「よいお年を!」と、一人で乾杯してみたりした。

(神山朝人)





# ヤンヒポのお天道様は見過ごすまい

尚、下記の物語はフィクションであり、実際に不法行為等が行われた事実は全くありません。

十一月のある日、青山通り近くの小じやれたビル三階。会議室とは言っても殺風景なフロアにメートルちょっとの真四角な机が一つとパイプ椅子が三脚置いて有る。そのうちの一つにヤンヒポは腰掛けていた。事の始まりは二週間ほど前に来た一本の電話である。自分の本業を知る数少ない知人から支払いをしないで逃げ回っているヤツがいるんだが、なんとかならないかという事だった。

まずは話を整理しよう。ここに(株)オフサイド(仮名)という会社がある。今回の依頼主である。オフサイドはビデオ・クリップやゲーム関係の映像制作会社だ。ここが平成七年にアバンギャルド(株)×(仮名)からの依頼で、ミュージックビデオの制作を請け負った。請求額は約四〇〇万。しかし、当時からアバンギャルドは経営困難に陥っており資金繰りがショートしていた。時を同じくしてアバンギャルドは不良債権を抱えていたのだ。アバンギャルドは音楽ビデオの制作販売が本業なのだが、(株)優音(音楽ビデオ卸業(仮名)に収めたビデオ代金、約四〇〇万円が未収となっていた。アバンギャルドとしては、オフサイドへ支払いをしたいのはやまやまだが、何せ資金が無い。そこで、優音への債権を回収してオフサイドへの支払いに充てたいと考えた。因に、現時点でもオフサイドとアバンギャルドは友好関係にある。オフサイドとしても、製作費を回収したいのはやまやまだが、アバンギャルドに資金が無い事は解りきっている。止むを得ず優音への債権回収をもって債務を受け取る事に同意した。

さて、ここで問題になってくるのはアバンギャルドと優音のやり取りである。優音という会社は、金山忠二(仮名)という男の個人会社だ。法律上の会社所在地は新宿五丁目になっているのだが、そこは早い段階で撤収しており、現在は自宅まで細々と営業しているとの事。自宅住所は杉並区下井草。自宅に移す前は中野区中野にある実家でも営業をしていたようだ。まあ、話だけ聞くと良くあるパターンだ。優

音の設立は平成三年頃。一念発起して新宿に会社を構えたが、最初の見込みと裏腹に経営がうまく行かず、拠点がだんだん都心から離れて行く。金山は昭和六年生まれなので七〇歳過ぎだろう。とうに花は過ぎ去り細々と暮らしている様が目に浮かぶ。はたしてそんな爺さんから四〇〇万もの金を回収できるのだろうか。ただ、金山も営業は続けており、普通に暮らしているらしい。なんとも頼りない情報ではあるが、好材料は無いよりましなのだ。そんな中、優音はアバンギャルドに対して納入された商品の代金を完済しないという暴挙に出た。それが平成八年末の事だ。優音にも言い分があったようだが、この件でアバンギャルドが訴訟をおこし、平成九年十二月にアバンギャルドが勝訴している。

一口に我々がやる債権回収とは言っても方法は色々ある。基本的な構図としては、金を貸した方が「金を返せ」とやる訳だが、実際は現金を貸す場合より何かの対価として金を受け取るはずが、支払い側の都合で決裁ができない。すると、もらえるはずの金が入らないので、金を貸している形になるのだ。この金銭トラブルは完全に民事事件となる。だから、金を払わないからといって警察に通報しても民事不介入原則があり官憲は一切手出しをしない。ただ、はなから支払う意志が無く対価を受け取る場合は詐欺罪や窃盗罪に当たる。無銭飲食や万引きはこちらである。その上に立ち、民法や刑法に抵触しない方法で、効果的に債権者へ迫る必要がある。一番多い方法は債権者から委任状を取り付ける。回収の代行だ。

取りあえず自宅を見に行く・・・閑静な住宅街だ・・・白いタイルの三階建て・・・シャッター付きの車庫まで・・・どうも、聞いている話と雰囲気が違う・・・確かに生活の匂いがする・・・

我々は債権者から回収額の中から手数料を取る。また、担保物件を押さえる場合や品物を金額に換算して受け取る代物返済なども有る。他には、債権自体を安値で買い取る場合もある。例えば一、〇〇〇万円の債権を持っているが、回収には時間も手間もかかり待っているなら、たとえ一〇〇万でも現金になれば御の字という事で、債権回収業者に一、〇〇〇万の債権を一〇〇万で売るのである。当然、債権を買った方は債権者に対して一、〇〇〇万貸しがある事になるので、全額回収すれば九〇〇万の儲けとなる。回収能力に自信のある連中はこちらの方法を好んで使う。借りている側としては、債権があまり正攻法な回収方法を取らない連中の手に渡るとなると、割と怖い事になる。単純に考えても取り立ては厳しいは、利子は高く再設定される事も有るのだから・・・合掌。

ここで、話を元に戻そう。兎にも角にも最終債務者の情報収集が第一歩となる。要は優音の金山忠二について周辺の調査を開始する。まずは会社の登記簿謄本を取る。これは、誰でも閲覧ができる。会社登録住所の管轄法務局へ行き、会社名等の必要事項を申請書に記入して、一、〇〇〇円程度の手数料を払うと、登記上の住所、役員、監査役の氏名、代表取締役の住所・氏名が判る。もちろん、合法的に登記してある会社に限られる訳だが、日本の税法上、よほど悪質な営業で無い限り、登記してあるものだ。その方が税務上割が良いのだから。今回は新宿が登記



その前に真新しい車のナンバーと車種を控えた事は言うまでも無い。因に、車種は新品のキャデラックだった。

上の住所だった為、大久保にある法務支局へ行って優音の登記簿謄本を取った。すると、代表は金山忠二、役員に金山則和(仮名)、監査役に金山ちづ(仮名)の名前が見つかった。いかにも家族経営企業らしい。もう一名役員の名前があったが、後の調査で既に死亡している事が判っている。各役員の名前に金山と付いているので、則和は息子、ちづは妻だと容易に想像できる。念のため登記簿謄本に出ている代表の現住所を元に住民票を押さえに行く。ただ、個人の住民票は簡単に入手できない。当然ながら、他人になりすまし住民票や戸籍謄本、その他全部証明書等を申請すると、有印私文書偽造、同行使の罪に問われるから注意が必要だ。

住民票で家族構成を確認したら、取りあえず自宅を見に行く。当然、本人等には知らせていない。まだ内偵段階だからだ。自宅は杉並区下井草にある閑静な住宅街だった。それも白いタイルの三階建て一戸建てだ。半地下部分にはシャッター付きの車庫まで完備している。どうも、聞いている話と雰囲気が違う。表からしばらく様子を見てみると、確かに生活の匂いがする。また、車庫のシャッターのすき間から眺めると真新しい車まで置いてある。決して細々と生活しているようには見えない。自分も少し気を引き締め直す必要がありそうだ。やはり、一番重要なのは、債権者の経済状態なのだから。次に、実家と言われる中野の住所を見に行く事にした。その前に真新しい車のナンバーと車種を控えた事は言うまでも無い。因に、車種は新品のキャデラックだった。

(次号に続く)

# She is Nippon

## 彼女はニッポン

～名詞の性別

またまたおわんにのって漂泊の航海中。波高し。



### She is sinking!

「沈んでるよ！」

### She? Who is she?

「彼女？彼女ってだれ？」



船・飛行機・乗用車などの乗り物

国名・都市名

を女性 (she, her, her, hers) とすることがある。

大学などで第二外国語として英語以外のヨーロッパ語を勉強したことがある人は、英語にはない名詞の「性」(男性、女性、中性)に煩わされた人も多いだろう。

学習する側としては幸いなことに、英語にはその区別はほとんどない。かつてあったが、多くが消えてしまった。だが、すべてが消えてしまったというわけでもない。人間や動物である。当たり前だが、人間や動物には性がある。だから boy や hero は男性名詞だし、woman や hostess は女性名詞である。代名詞では当然、he と she に区別される。

Ulysees is a hero. He is great.

「ユリシーズは英雄だ。彼は偉大だ」

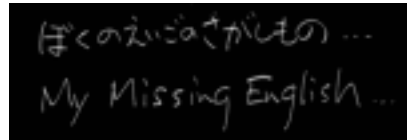
動物では、cock (おんどり) hen (めんどり) というものもある。代名詞ではどちらも it で構わないが、愛情を持って he、she を使うことだってある。

The name of my hen is Anita. She [It] is pretty nasty.

「ぼくのめんどりの名前はアニータ。彼女はちょっといじわるなんだ」

さて、本題はここから。自分が使っている船・飛行機・乗用車などの乗り物や、国名・都市名を女性と扱うことがあると聞くとどうだろう。ちょっと違和感があるかもしれない。サダムとキムが戸惑っているのもそこである。

ふつうお椀を she で受けることはありえないが、この場合、船の役目を果たしている。だからヨタローは she と受けたのである。



学校英語にわずれものありませんか？

また、she があるなら her もある。

The ship lost her mast in the storm.

「その船は嵐でマストを失った」

If America wants to be respected, she must cooperate with the rest of the world.

「尊敬されたいのなら、アメリカは自分以外の世界と協調すべきである」

respect = 尊敬する  
cooperate = 協力する  
rest = 残り(の国々)

確かにわれわれは生まれ育った国のことを「mother land (母国)」と言うし、美しい帆船は「lady (貴婦人)」と呼ばれるが、やはり国や船を「彼女」とするのは何かちょっと変な感じがする。実際この使い方はやや古風な感もあり、現代では it (its) もよく使われる。

“ Here is America struck by Almighty God in one of its vital organ. ”

「全能なる神によりその急所のひとつを突かれたアメリカがここにある」

出典 2001年9月11日のテロ後、最初のビン・ラディンによる演説の冒頭部分。英訳はライター。

(望月)

### Sinking?

「沈んでるの？」



### Yes, she is.

「ええ、そうですね」



# 松本と話そう 「ポンポンパン」

お疲れさん。  
みんな元気ですか？  
年末、カウントダウン。早いよね。世紀末なんて騒いでいたのはついこの間だったのにね。

あゝ、リンパ腺が痛い。ズイエーでなきゃいいが。今年を振り返るとどんな年だったのだろうか？ テレビでやってたが、どっかの坊主(清水寺だったのかも)が「帰」だ、なんていつて白紙に墨でこれするならば、「帰」だ、なんていつて白紙に墨でこれどどだ、とばかりに得意げに書いておられた。何、北朝鮮がらみか？ 原点に戻れということなのか？ それは知らぬが、それはそれとして、僕は僕なりにやってみるとどんな漢字になるだろうか？

「臆」。これだ。やっぱ昨年度の九・一一はでかかったよ。

(一面から続く)

わらぬ一般人に過ぎない。どんなに素晴らしい図面を見せられても、これからできあがるであろう素晴らしい家の姿を思い浮かべるのは困難である。そこで、どうするかというと、設計事務所では模型やら3Dグラフィクスを用意して、こんな家になる予定なんですよ、と説明に努めるわけである。これぐらいしつてあげれば素人になってわかるだろうさ、というありがたい配慮である。

私たちは数値でものを理解することに閉じては、多くの局面で、素人である。指で数えられるのは十まで。つまり、一、二、三……八、九、十……あとは、たくさん、というのが、人間の自然である。日本では算数教育がほぼ進んでいるので、実際には、もつともつと大きい数字やマイナスでさえ暗算ですらすらこなしてしまう人々も少なくないけれど、それが人間として自然な姿かどうか。

三億円を持って百円ショップで百万三個ばかり、要るような要らないようなものを購入した。財布の中の残金はいくらか。正解は一億九千九百九十九万九千六百八十五円だが、浮かれ成金の私は、端数は気にせず、たくさんと答えるだろう。あるいは、二億に

たよつた。

仕事柄、十代の小僧、小娘とよう接します。奴らはやはり最も感度が鋭い時期にいるため、奴らが無意識に吐く言葉、振る舞いは実はその時代の空気をよく反映してたりします。そう、だからそこら辺をキヤッチすると世相もキヤッチできたりもする。

「あり得ない。」とくにブス姉ちゃんが多発してましたが、聞いている限りでは、あの世代では今年の流行語だと思ふ。とにかくこの言葉はどういうわけか気に入らないのだがなせだろう。そう、なんでお前はそんな簡単に断言できるのか。そしてなんでそんな簡単に接点を断つのか。見切り早いのか。想像力を殺すのか。そう、この言葉を述べることによつて一気に思考回路が断ち切られてしまうからだ。思考をストップさせたいからだ。どうしてそうしたいのかという現実を見たくないからだ。なぜ現実を見たくないかという現実が酷過ぎるからだ。

ちよつと欠けるぐらいかな、と。年末ジャンボの結果を目前に皮算用をしている仮想成金があげられる例ではリアリティがないけれど、このようなざつとした感覚、これが人間をして人間たらしめる肝要な点である。事物をより精密に把握していくことも重要だが、より重要なのは、ざつくりぱつとさとと感じ取ることではないか。堅苦しく直観的認識などと言つこともできそう。

残高照会して、ああ、辛うじて今月の引き落としはクリアできそうだ、ありがたや、ありがたや、と思つのが人間。そのわずかな預金の殊更わずかな利息を算出するのは機械の仕事。アナログの時計を眺めて、四時頃にしようか、と待ち合わせるのが人間。GPMンが駆け抜ける千分の一秒をも見逃さずに正確に時を刻むのは機械の仕事。

「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、ななつ、やっつ、今、何刻だい」  
「へえ、九刻。正確には十一時五十九分五十三秒でございます」  
これでは、とき蕎麦も成立しない。

(全太)

える貿易センタービルと共に弾け、数千人も命が消えて亡くなったのだから。そりゃあ、あり得ないことでしょう。しかしあり得たのだから。そうこれはもうどう心のなかで処理していいか分からない。「あり得ない。」といつてfuseを飛ばし、電源切るしかないよな。自分の精神的安定を守るには。

「法学部行きたいです。」今年はそのことを言っている受験生が多い。「弁護士、面白そうです。」と。実際、去年辺りから法学部受験者数が急に増えている。ちよつと前は心理学でした。ちなみに僕の頃は国際政治/国際文化がそうでした。そう、日本がバブルの時代に入りアメリカの土地、建物をジャパマンナーが買い漁ろうとし始めていた頃です。マイケル富岡とか、グレース何とかと、怪しいバイリンガルなんていうのがもてはやされた時期です。ああ、懐かしい黄金の八〇年代。ベストヒットUSA。小林克也。話逸れたな。そう、何をいいたいかといえは、実は大学入試で花形となる学部も世相を雄弁に語る。そういうことなんです。では、法学部弁護士で何が語られている？ 法律は権利を守るもの。

弁護士はそれを危機とあらば代行してくれる人。つまり、ここでも守りを志向している。びくついているわけです。彼らだけでない。社会全体が、です。ですから、今年を象徴する言葉は「臆」といつているわけです。

しかし、これだと余計、ますますなると思うのだが。ネガなスパイラルに入っていくと思うのだが。

独裁者が出てこなきゃいいが。

てなこと、ボジな二〇〇三年でありますように。

### 編集後記

からす新聞第四巻第一号(通巻第四八号)無事、発刊できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発刊予定日は二〇〇三年一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,  
Tokyo 166-0015,  
Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta@geta-s.com

篠崎健一アトリエ